令和６年度　母子保健指導者養成研
乳幼児健康診査に関する研修②

多職種連携による
発達障害児支援

飛騨市市民福祉部総合福祉課
地域生活安心支援センター「ふらっと」
青木　陽子

今日お話ししたいこと

1　発達支援センターから
　　地域生活安心支援センター「ふらっと」へ

2　飛騨市の発達支援の概要

3　「ふらっと」の包括的支援の事例

1　発達支援センターから
地域生活安心支援センター「ふらっと」へ

【はじまり】

・現市長が市長になった頃、特性の強いお子さん、コミュニケーションの苦手なお子さんを持つお母さま方から訴えがあった。

「学校の先生をなんとかしてほしい！」

・自分の子どもは接するのが難しい。それを先生に理解してもらいたいが、なかなか話が通じない。通じる先生がいても人事異動でまたやり直し。

発達障がい児を持つ家族の困り感

「それは無理です」と即答。

・学校の先生は発達の専門家じゃないし忙しすぎてそこまで求めるのは無理。

・学校じゃないところにバイパスを作りそこで専門の人が支援するように考えます。（ここが原点）

＊学校じゃないところ→医療（児童精神科）
発達支援センターなど

R2までは「発達支援センター」だった

障がい福祉課の中に配置されていて、障害児相談（主に乳幼児の発達相談）やサービスの繋ぎ等をしていた。

- 窓口相談の他に現場にも出ていた。
- 保健師さんと連携して1歳6ヵ月健診、２歳児相談、３歳児健診での遊びの提供、その場で保護者からの発達相談。
- 保健師、児童発達支援の保育士、発達支援センターとで、毎月フォローアップ教室の活動
- 児童発達支援や医療、リハビリへの繋ぎ。
- 保育園への情報提供。加配保育士の申請。
- 療育保育士、保健師、PTによる保育園訪問。
- 保健センターや保育園との連絡会議１/２ヶ月
- 学校・教育委員会と就学児の引き継ぎに連携 就学相談や教育支援委員会に参加。
- 県の療育事業で医師を派遣してもらった。

たぶん多くの自治体に見られる形

【保健師さんとの連携】

- 保健師さんの母子健診事業の「発達」について協働し、リハビリや児童発達支援、保育園などの福祉関係機関との連携をとっていた。
- 飛騨市は月に生まれる赤ちゃんが１０名程。なので、ほぼ全てのお子さんを把握できた。
- 飛騨市は連携が取れている！と言われることも多く現場は特に問題を感じてなかった。

そこに
発達支援センターの強化？！

見えてなかった問題点

課題は就学以降の相談の希薄さ。「途切れのない支援」の奥深さ。

・保育園に入園する前までは比較的手厚く、入園を希望するお子さんはどんなに障害があっても１００％入園できる。（加配保育士の体制◎）

・しかし小学校に情報を引き継ぎをした後、就学以降のお子さんの相談はあまりなかった。

↓　　（障害サービス等の相談は別）

学校の中で教員が対応していた。

教員から検査や診断が必要な場合の相談はあり医療へかかるための「繋ぎ」等はしていたが、保護者が何でも相談にくる場所ではなかった。

＊専門性が低かった。

・保護者も学校も「学習、行き渋りなど学校での困りごとの相談は学校にする」ことが普通だった。学校では先生が、自分なりの精一杯で対応していた。それがあたりまえだった。

・ましてや中学生、高校性になってからの相談はほぼなかった。

たぶん多くの自治体が同じ

外から見ると課題であることや、保護者からするとがっかりすることがあっても現場はそれなりにやっているので気付かないことが多い。（苦情もこない）

さらに「異動」があり問題視されにくい

飛騨市発達支援センター組織強化

・H29　専任の発達支援センター長配置（事務職の課長）
学校訪問相談員（教員OB）配置
飛騨市こどものこころクリニック開設（市直営の児童精神科）

・H30　学校訪問相談員（教員OB）増員
市直営の「保育所等訪問支援」を開始（乳幼児期からの支援の引き継ぎ）
ふりーすぺーす（生きづらさを抱える人の居場所）　開設
PTによる学校授業観察、体幹・姿勢等の改善への助言を始める

・R1　**NPO法人はびりすに専門相談を委託**
作業療法士（OT）による専門相談を開始
→生活への適応性をよくする「OT相談」の実施
公認心理士、看護師を配置　※児童の発達検査、心理検査もセンターで実施。
市直営の「放課後等デイサービス」を開設（OTによる読み書き支援）

・**R2　発達支援センターを「総合相談窓口」に拡充（OTによる専門相談を含む）**

・**R3　障害福祉課から出て、地域生活安心支援センター「ふらっと」を開設**

・**R4　総合福祉課を新設し、「ふらっと」はその課内室として設置。相談の枠が広がる。**

R2 飛騨市の障がいの定義を作った

第2期飛騨市生涯安心計画（＝法定上の障がい福祉計画）にて

「自分のやりたいことがやりたいようにできないこと」と定めた

つまり、対象者は何らかの生きづらさを感じる人すべてになった。
それにより、障がいが他人事でなくなった。

心身機能や能力の障がい

（医学的分類）

→

生活領域における作業遂行

（作業療法士の視点）

「地域生活に焦点を当て、住みたいところで安心して暮らし続けていくための取組を行います」

２　飛騨市の発達支援の概要

障がいの定義を定めてから、発達支援、子どもたちの生育支援の体制整備を始めました。今、取り組んでいることの概要をご紹介します。

飛騨市のこだわりポイント

・身体、心、社会性の３面からその子の特性や適した環境を**専門的視点**で捉え、必要な支援の見立てを行ってアプローチしていくこと。

・医療系**専門家**が随時きちんと関われる支援体制をつくること。

1　産前産後～乳児期

（中堅・若手のやる気に満ちた**地元開業助産師**）

親の心身の安定、愛着形成への支援！

・24時間365日Lineで助産師とつながれる**「MY助産師制度」**
　夜中に「助けて」とlineが入ったことも。
・週2日助産師がいる自由な集いの場「にこにこルームまるん」を開催。
　相談もでき、リラックスもできる時間として人気。

「わたしの助産師さん ・むすび」

2　乳児期

（群馬の**スーパー保健師**/ゆう地域支援事業團）

こどもが生活しやすいからだの基礎をつくり、自分らしく生きる力を育む！

・生きていく力の基礎は新生児から…「身体調和支援」を展開し、
　独自メソッドのマッサージや体操を通じて感覚を育む。
・バランスや筋肉の緊張を整え、感覚が入りやすい、動かしやすい、
　生活しやすい身体づくりを支援する**「はぐみんの日」**を開催。
・親子の呼吸を合わせ、関係つくりも促進。

「はぐみんの日」町村純子保健師

もっと動ける！赤ちゃんの発達をもっと楽しもう！こどもは地域で、みんなで育てよう！

3　乳幼児期

（**スーパー作業療法士**/はびりす）

こどもの見立てから将来の姿をイメージし、強みを明確に親に返す！
・７カ月児相談に参加。（まだ困り感のない親子にも関われる）
・乳幼児遊びの広場「わくわくデー」参加。
・保育園訪問　…etc.
常にこどもと家族の**ウェルビーイングを考える視点**の相談が大人気！

「わくわくデー」山口作業療法士

4　就学期

（**スーパー作業療法士**/はびりす）

全国初の**学校作業療法室**の設置

・個別支援　　COOP：困ってることを自分で解決する作戦を
　　一緒に立てて実践し、振り返り、改善していく。
・集団支援　　自分や友達の個性を知る多様性理解、整える瞑想などの授業。
　　こどもたちが過ごしやすくなる環境調整。
・支援者支援　教員や保護者の相談に対応。家庭内の困難にも対応。
　　学校と家庭の連携サポート。 教員・保護者への研修。

「学校作業療法」奥津作業療法士

先生は学習を教えるプロ。こどもの発達や行動は、作業の見立てや療育のプロの作業療法士に。

5　医療

- （**飛騨市こどものこころクリニック**/児童精神科医、臨床心理士、看護師 ）

市直営の児童精神科診療所（乳幼児から高校生まで）

・児童精神科の治療目的はソーシャルワーク

・教育への側面的支援

「学校は、こどもが育っていく生活の中で、最も大きな影響を与える環境」

・**福祉、教育と連携**。看護師が毎月の「ふらっと月例会」に参加。

飛騨市こどものこころクリニック

- （**思春期健診**/小児科医・精神科医）＊検証実施中

大切な思春期。大人になる前に健全な思春期を。

・**支援希求力**：悩んだらちゃんと大人に相談する。医者に相談できる、助けを求めることができる、ということを知る。

・**メタ認知**：　自分の健康状態や特性を理解する。社会に出る前に、自分を知ることで困難を予防したり健康を維持することに繋げて欲しい。

全国に先駆け　飛騨市 8月から「思春期健診」

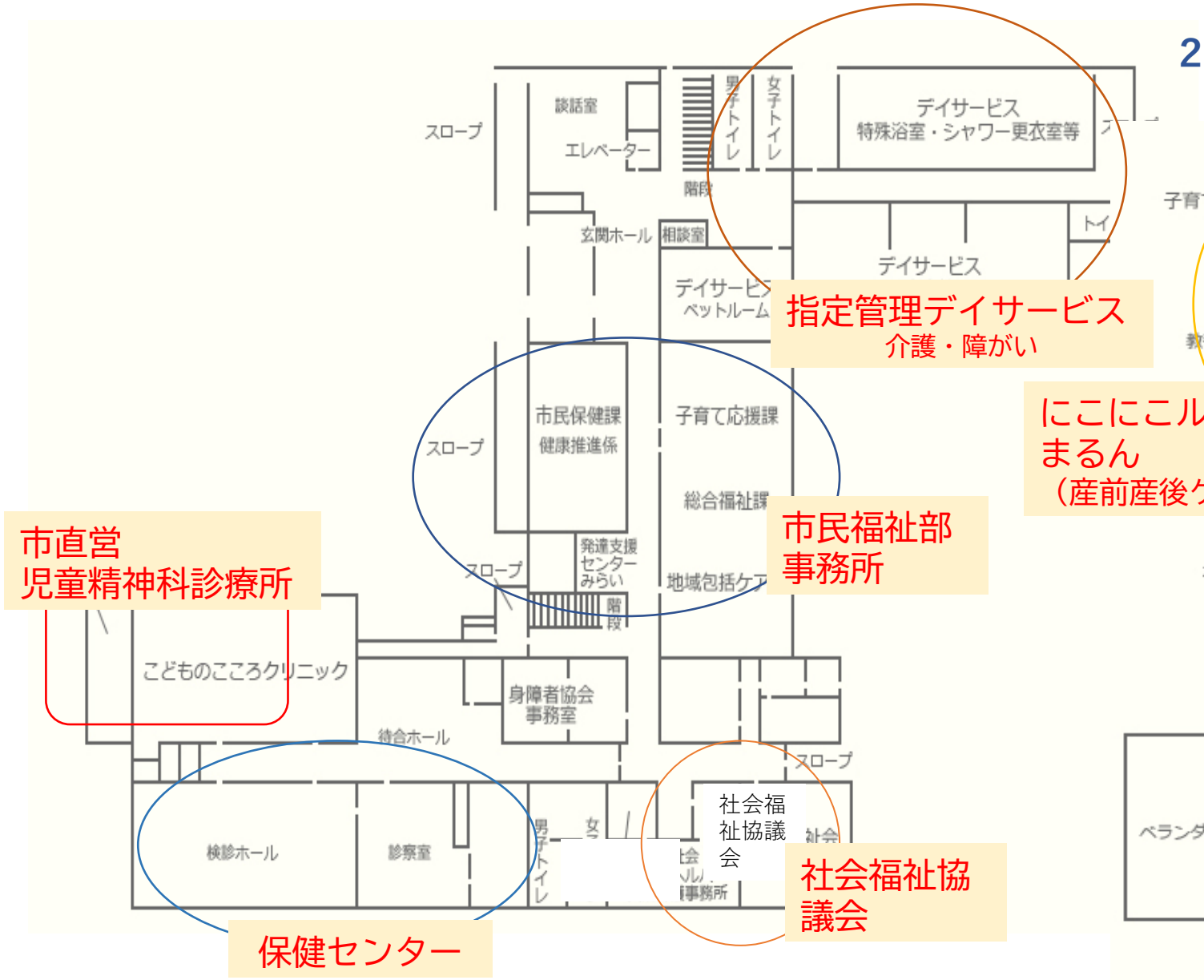
10代の不調 未然に発見

担当医「予防医療のモデル 展開を」

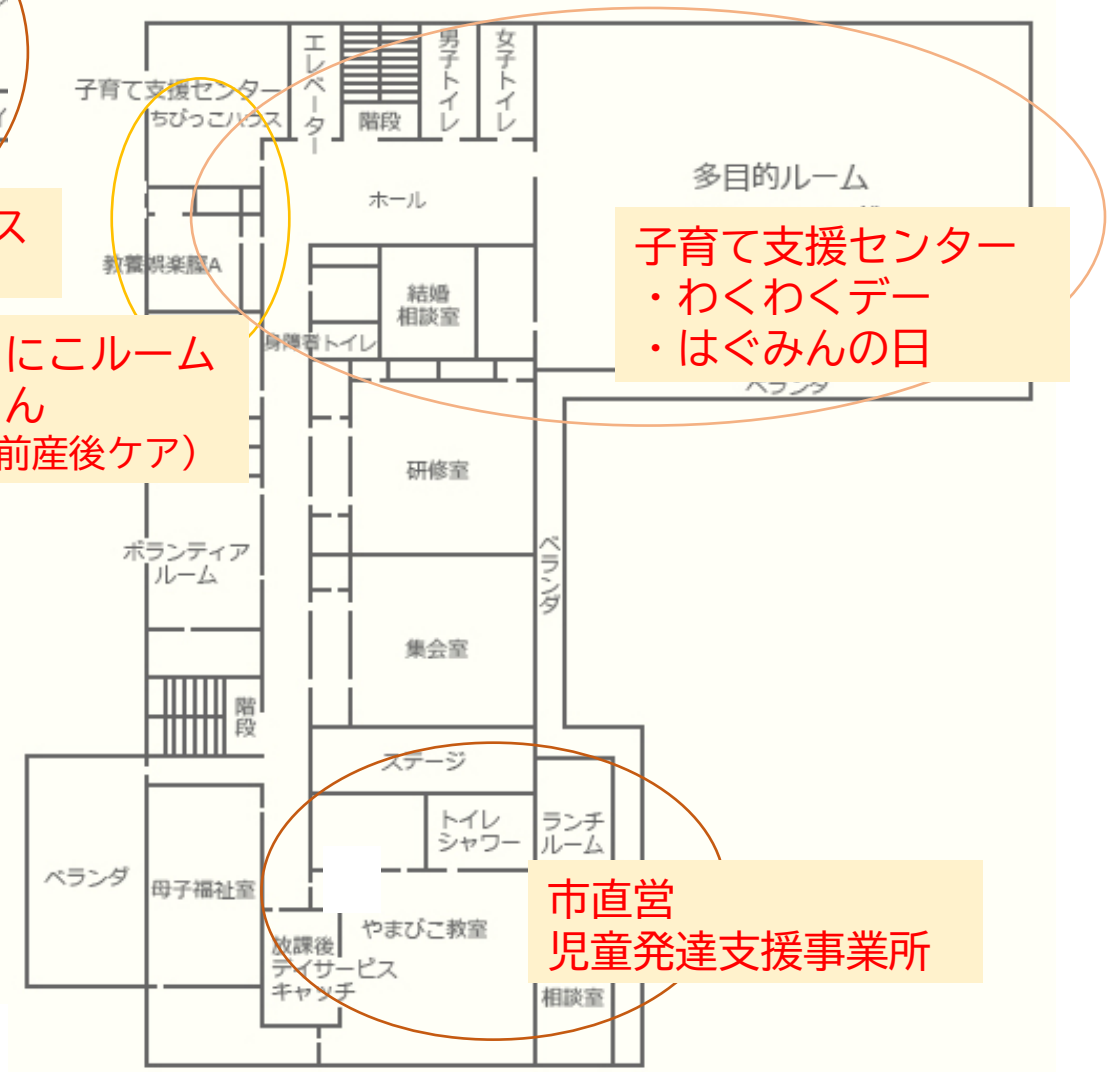
思春期健診/阪下和美医師

市民福祉部のあるハートピア古川　館内図

1階フロア



2階フロア



6　支援ラボ事業

支援の現場で専門家が必要と感じた支援資源を確立するために
試行的に実践していける事業を立ち上げました。（財源はふるさと納税）

・成人の相談から、さかのぼって乳幼児期に、あるいは児童期に、こんな支援があったら予防になったのでは…と思われる発達支援。
・相談で整った方が、その状態を維持するためにメンテナンスが必要。支援者がいなくてもセルフメンテナンスができる居場所が作りたい。しかしそんな資源は飛騨市にはない！新しい支援策となる希望を持ち実施。

社会に出る前に自分を知り（メタ認知）支援希求力をつける

思春期健診

すべてのこどもが学校の中で作業療法士の支援を受ける

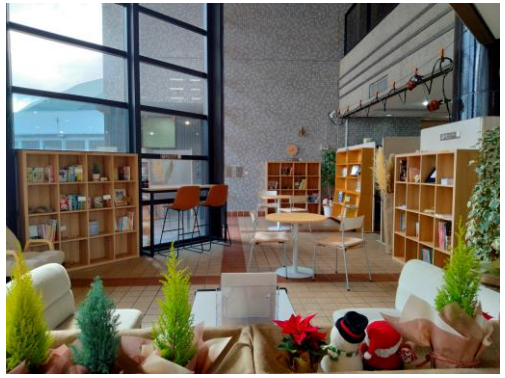
学校作業療法室

心のエネルギーが低下とりあえず体を鍛えると…心も動く！

パワーふらっと

人と会えなくても本で社会とつながる新たな居場所

ふらっとまちライブラリー



3　「ふらっと」の包括的支援の事例

地域生活安心支援センター「ふらっと」

Family　Life　Adviser　Team

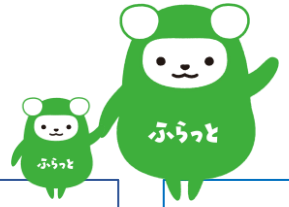
新規相談件数
約400~500件
（継続除く）

児童51％　成人47％
その他2％

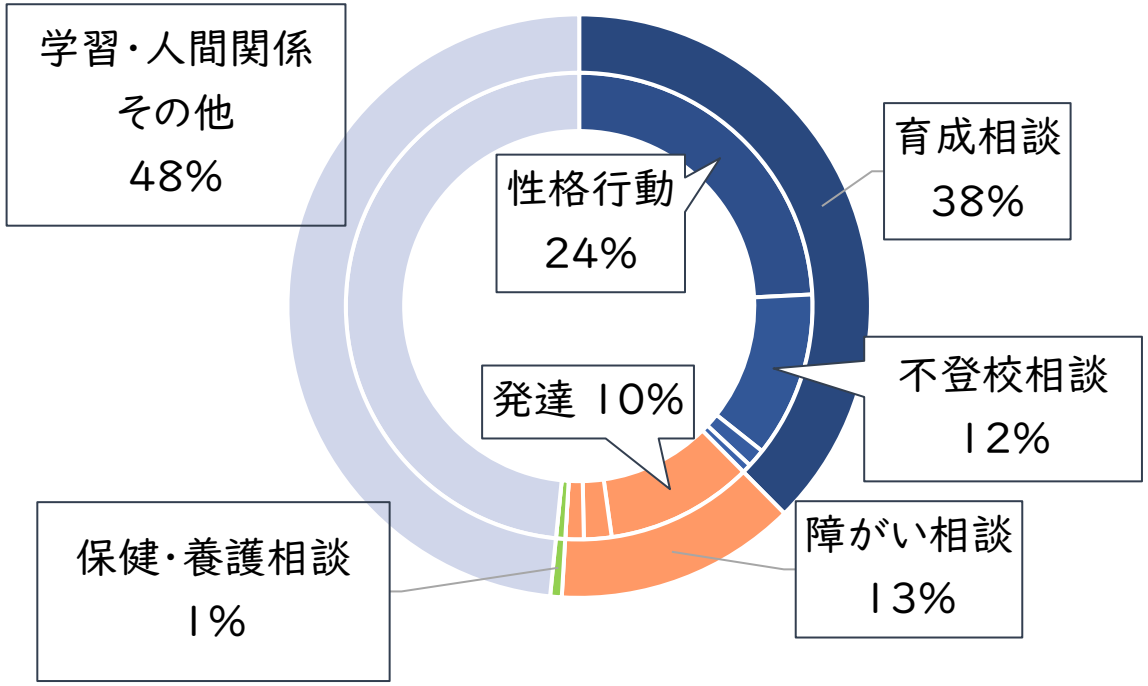
「ふらっと」が大事にしていること

・人は生涯、発達している。
・複雑なケースには専門家の見立てを入れる。
・困り事はきれいに分類できない。
・個人的な困りごとでも、その人をとりまく環境（家族など）の調整が大事。
・できること、できないこと、枠を決め自分たちで止めない。
・相談者のニーズを深く考える。

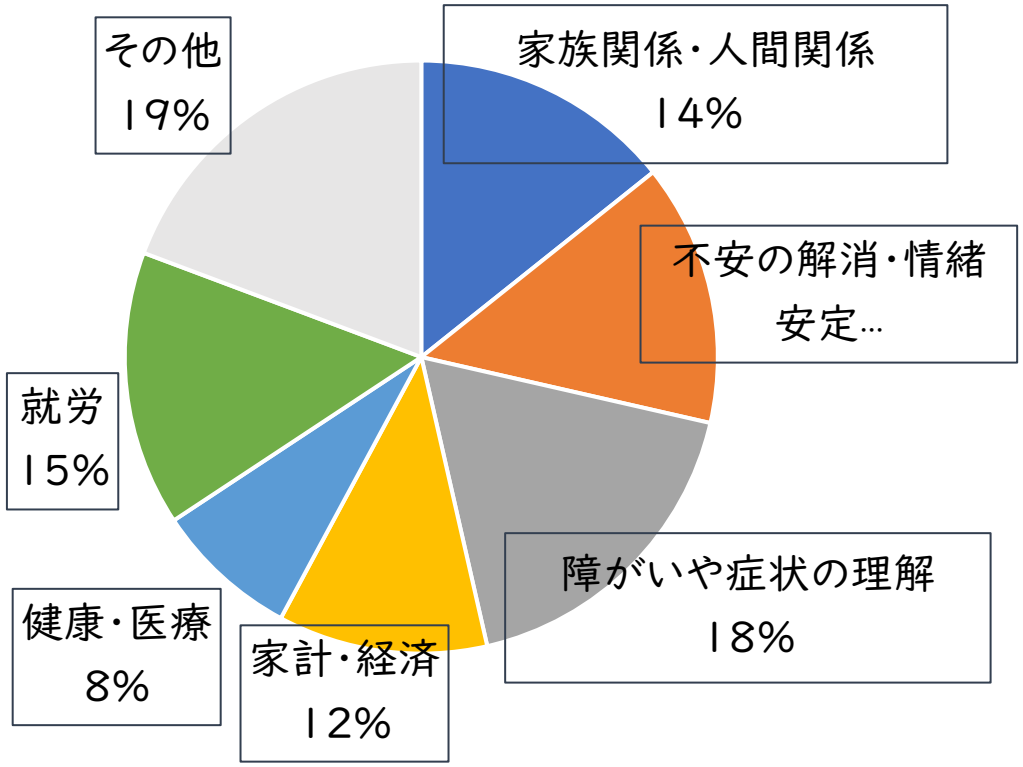
相談の内容



R5　相談内容（児童）



R5　相談内容（成人）



こんな相談ありました・・（乳幼児）

・特に手がかからないし困っているわけではないんだけど、
寝返りがまだできなくて発達が遅いのかな？と気になります。
→様子見？絶対しません！

・みんなが集まる場所に連れてに行くと、うちの子だけ１人で走り回ったり、
他児の遊んでいるものを取ったりして嫌な顔をされる。（うちの子ADHDですか？）
→みんなのいるところに連れて行きたくない。

・言葉が遅いと言われた。こちらが言うことは理解しているように見えるし反応もかわいい。
でも言葉では言えない。（うちの子遅れてる？）
→同居の両親や保育士と話すのがストレス。

・ちょっと人とズレているのかもしれない。親はこのズレをかわいいと思っていたのに、
保育園から「本人が困っているから」と言われ検査をすすめられた。
（本人は困っているの？このままではダメなの？検査をしたら何か変わるの？）
→みんなに（平均に）近づけなければならないのか。

・みんなと一緒に活動できない未満児。手についた土をすぐ払う、帽子は嫌がる。
（過敏なの？）まだ喋れないし何が嫌なのかわかりにくい。
→検索すると自閉症スペクトラムの文字が…

７ヶ月相談に保健師さんと連携！

・7ヶ月相談に入ると、みんなお母さんのお膝に抱っこされたり横向きに抱っこされたり。
・よく動いて反応のいい子もいれば、おとなしい子もいる。
・一般的に、加速大すきで多動なタイプのお子さんは、相談にくることが多いが、おとなしいタイプの子のお母さんは、困り感が少ない。
・「発達の相談がしたい」ほどでもない親子（おとなしい子）にも保健事業の中で介入できる！

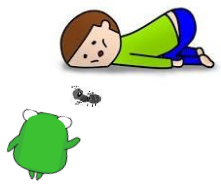
作業療法士が入って話しかけると…
「抱っこを嫌がります。」
・この子は背中のアクセルが強いね。まんまる抱っこで背中を緩めよう。リラックス～。
・この子は警戒心が強いね。体のブラッシングで皮膚感覚を伸ばそう！
「お座りが上手にできません」
・こうやって（やって見せる）座骨を意識させるといいですよ

●様子見なんてしません！その時間がもったいない
伸ばしポイントがたくさんある！

・その場でみるみる体が変わるのがわかるお子さんもいて、「うちの子も見てください」状態になることも。
・お母さんの姿勢にも注目。お母さんがリラックスできていないことも多い。
・お子さんの個性を否定せず、発達促進のアドバイスをしているので、場がとにかく明るくなる。
・繊細な親子には気持ちを緩めるような言葉がけを。
・身体調和支援の町村保健師と連携して、筋緊張を緩めるアプローチも積極的にしている。

子育ては語りながら、共感しながら、みんなでする
お母さんを孤立させないことが何より大事！

作業療法士の視点がちがった事例



・外遊びは大好きなのに、友だちと遊ばずに寝そべって「アリ」を眺めて遊ぶBくん。
友だちとの遊びが持続せず、外では決まってアリを見て過ごすようになった。
保育士にその日の予定を毎日聞き、「散歩」の時間があると落ち込む。 1人で走り回るのは好きなのに。。。

保育園の先生は・・・
・体操の時も寝そべることがあるし、体幹が弱いのかな？
・すこし自閉的で1人で決まった遊びがしたいのかな？
・やる気のない姿が多く見られる。→なまけやすいの？
→もっと友だちと遊んでほしい！
・保育士が一緒になってドッチボールなど誘い、運動系の遊び が「楽しい！」と思ってもらえるように計画しよう！
・活動に自信がないのかもしれないので、自信をつけたい

●全くちがったOTの見立て
・座って話を聞くときは、手のひらを膝の上にのせて腕で体を固定している。走るときは「欽ちゃん走り」。
・1人で走りまわることはOK。マイペースに遊具でも遊んでいる。
・（本人を触って確認） Bくんは肋骨の可動域が狭く呼吸がうまくできていない。
・だから、みんなに合わせて歩かなくてはいけない散歩は苦しいし、外で遊んでいても苦しくなると寝そべるようになった。寝そべった先にアリがいたのでおもしろくなり、「えらくなる→寝そべる→アリ」という流れができたのだと思う。

●Bくんの母とも共有し可動域を広げる運動を伝える。
時々、遊びの広場にてOTが、体の確認をしていく。
（のちの不登校予防にもなるかもしれない）

こんな相談ありました・・（学童）

・6年生が数人で１人の４年生に怒っていた。
それを見て苦しくなった3年生の女児、学校に行けなくなった。

・特に大きな理由はないが不登校となり、受診したら「適応障害」。
これからどうしたらいいの？

・ひらがながうまく書けない。先生が「赤ペン」で直してくれるが、毎回先生の字も違って見える。宿題も苦痛。

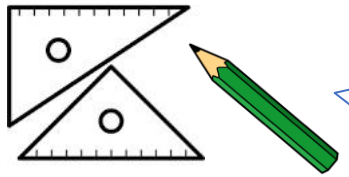
・不器用だがまじめにがんばることのできる中学生。先生に「（部活の）部長をやらないか」と言われ、つい「はい」と言ってしまった。そして登校できなくなった。
（期待してくれた先生にはそんな理由は言えない。。）

・「教室で苦しくなったら先生に言って部屋を出ていいよ」と言われているが、「先生…」と声を出すタイミングがわからない。
言えないストレスでさらに苦しく、クラスには居られなくなった。

・高校の進学クラスに入学し苦しくなり不登校になった。

・高校に入学。目的を見失い体調を崩して不登校になった。
（中３の進路指導がいかに大切か）

学校作業療法でうまくいった事例①



手先が不器用で作業が苦手な A くん

・通級でOTのところに来たAくん。
「棒グラフがうまく書けないんだ。」と相談。

・いつも使っている（既定の）三角定規を使い描こうとすると棒が歪む。これまで学校の先生からは「ゆっくりでいいよ」「丁寧に描こう」と励まされてきたが、うまく描けない。

・「なぜ描けないと思う？」との問いに「目がチカチカする」と答える。（メモリが見にくい）押さえている定規もズレたりしている。
（目と手の協応）

目がチカチカしない作戦（COOP）
「こっちの定規を使ってみよう！」

●OTの見立てと対応

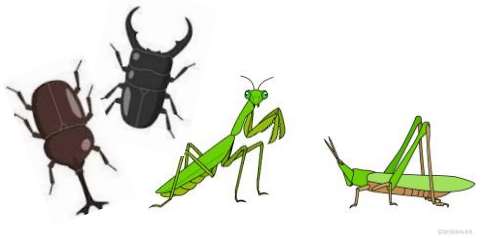
・規定の定規は薄っすらと色がついており、メモリが見やすく書いてあるため、方眼紙の上に置くとチカチカして見えにくいのだろうと推測した。

・海外製の透明な定規を提案。その定規はメモリがなく、既定のものより厚みがあり重い。不器用な手でも感じやすく、押さえたり位置を合わせたりしやすい。

・その定規を使って挑戦したら「描けた！」と笑顔になった。「何が描きやすかった？」と確認すると「透明だから目がチカチカしない」「持ちやすかった」などと作戦の振り返りをした。

手指が不器用な子は教科書をめくったり、文字を書いたりするのにも、一苦労である。軍手やグローブをはめて作業していると想像すると、わかりやすい。

学校作業療法でうまくいった事例②



落ち着きがなく不適応行動が多くなったBくん

・もともとじっとしているのが得意ではなかったBくん。
それでも学校の理解のもと、クールダウンの部屋を利用したりしながら、授業も受けていた。

・しかし、立ち歩いたりなど活動に集中することができなくなり、注意されることが増えた。
次第に不適応行動が多くなり、学校への行き渋りも出てきた。

・学校では特に大きな原因は思いつかず、学習がむずかしくなったのだろうかと考えたりしていた。また、家庭でも落ち着かない姿が増えているとの情報から生活の中でイライラすることがないか、と保護者と生活状況（朝ごはん、睡眠時間など）話し合ったがよくわからなかった。

●OTの見立てと対応

・OTは不適応行動が表れ始めたのはいつ頃かを丁寧に聞き取った。すると、授業にやる気がなくなったのは、秋が終わり虫が取れなくなった時期とわかった。
B君は虫が大好きで学校が終わると虫取りに夢中になっていた。

・「願望作業」が充実してこそ「義務作業」をこなすことができる。願望作業ができなくなったことでエネルギーが下がってしまい、授業を受ける（義務作業）に力が入らなくなったと思われる。

・しっかりさせようと規制するのではなく、好きな昆虫を教材につかったり、家でも楽しめる活動をするように意識を変えたところ、次第に落ち着いてきた。

成人の相談でも知的障害の方が、
賽銭泥棒を繰り返し逮捕されてしまい、
その時期を聞き取ると、大好きな釣りに
行けない時期であった。

余暇の大切さは年齢を超えて課題が大きいのかもしれない！

義務作業

願望作業

安心・安定

こんな相談ありました・・（成人）

・自閉症スペクトラムの20代男性。高校のとき先生から
「障がい手帳がないから一般就労しかない」と聞き、母は
一生懸命勉強させた。結果、一般就労できたが接客業に配属され数か月で退職。

・障がい手帳も診断もない40代女性。中学では５教科５００点。陸上もがんばっていた。
特に目的もなく高校に入学し、同級生に嫌なことをを言われたのをきっかけに長い引きこもりに入る。

・スーパーの駐車場で次々と車をぶつけ、警察に捕まった30代男性。学生のときも「カッとなると何をするかわからない」と言われていた。
就職できずそのまま家族が面倒を見て過ごす状態が続いている。

・「仕事がしたい」→自分は障がいではない。がんばれば仕事なんて出来る。
どこに就労してもうまくいかず何度も相談を繰り返す20代男性。お母さんも同化。
障がい認知の難しさ。母が離れてうまくいくケースもある。

・子どもの発達障がいの相談にみえた母親。話を聞くうちに母親自身の相談になる。
生活困窮者でもあり、家族支援が必要であった。

表向きは社会に溶け込んでいるようにみえても、軽度の知的障がいや精神障がいの傾向があったりするケースが多い。

成人の相談から市の予防支援を考えた事例　①

●40代のAさんは、車でスーパーに買い物に行き、駐車場で、他人の車にぶつけてしまった。ちょうど近くにパトカーがいて警察が対応に来た。
Aさんは警察の抑制に応じず、次々と車をぶつけてしまい逮捕されてしまった。
同級生からも「以前からカッとすると何をするかわからない」という声もあり、地元での就労も困難に。

●感覚プロファイル検査
・感覚特性がレッドゾーン。刺激に敏感な「過敏性」も高いうえに刺激に鈍感な「低登録」まで高く、わかりずらい人だった。「ぼんやりしているのに、刺激には過敏に反応する。ドキドキの強い人」。

● OTの見立て
・カッとすると何をするかわからない人ではなく、ドキドキでパニックになる人。自分のタイプをしり、穏やかに過ごすことが大切。セルフコントロール訓練ができるとよいが、年齢的、生活習慣的に簡単ではない。

●Aさんの相談から
・Aさんは、ドキドキすると不適応な行動になってしまう。そのことを自分で理解して生活することは大切だがマインドフルネスなどの訓練はむずかしい。
・でもAさんが小学生だったら…！
　・ドキドキタイプで行動がまとまらない子どもがたくさんいる。
　・その子たちの成人の姿がAさんにつながる。社会の中で予防を取り入れたい。
　・小学生だと呼吸法など訓練が効果的。
・学校作業療法室で、クラスの授業の中にマインドフルネス（瞑想、呼吸）を取り入れよう！
　→クラス全体が落ち着き、勉強に向かう整えになる。
・ふらっと相談の中でも情緒で行動が整わない人に、（病気ではないので医療ではリハビリができないため）福祉的観点から支援を取り入れよう！

成人の相談から市の予防支援を考えた事例　②

●30代のBさんは自宅の階段をすごい勢いで降りたり、自室でも落ち着かず、跳んだりしている。家族が「静かに」と言っても直らない。訪問すると布団に潜って出てこない。でも布団の中で反応したり、手を振ったりして意思表示をしてくれる。家族から、「部屋や階段でケガをしないように行動して欲しい」という願いがあり、相談にみえた。

●OTの見立て

・感覚（触覚など）が未熟なまま、もともとの不器用さと相まってドタバタとした動きになってしまう。

・感覚が鈍磨で強い刺激で動きを（自分を）確認している。

・逆に対人に関しては過敏。雰囲気を強く感じ、距離を縮められると怖がる。

●家族の願いに対応

・階段や部屋に硬めの人口芝を敷くことで動きがゆっくりになり、階段もソロソロと降りるようになった！

・慣れると戻るので時々芝の硬さや素材を変える。

●Bさんの相談から

・Bさんはもともと触覚過敏などの発達特性が強かった。乳幼児期に徹底的に感覚を育てる遊びをしていたら、ここまで人と関われない状態ではなかったかもしれない今、触覚を刺激することはむずかしい。

・乳幼児期は感覚や神経が急激に育つ時期である。飛騨市の乳幼児を対象に、この時期こそ脳の発達を促すワークショップ「はぐみんの日」を計画、専門家に委託して実施に向かった。
スキンシップをとりながら、体の部位に効果的な触り方をすることで、緊張を緩め、バランスが整い生活がしやすい体へと発達が促進される。また、皮膚感覚も育つことで、後天的な過敏性の予防にもなると期待する。

・Bさんの母も子どもが小さい頃は孤立感のようなものを感じていた。「はぐみんの日」は、何より母の育児不安などを相談し合いながら、みんなでこどもを育てる場を目指している。　　R6～政策（ラボ）へ

多職種連携の発達障がい児を支える支援①」

お母さんからの相談：発達特性が強いわが子。不登校にならないか心配
特に大きな原因はなかったが、学校に行けなくなってきた。
医療機関に相談したら「無理に行かせなくていい」と言われた。
だけど…このままではずっと学校に行けなくなるのではと心配。

母のニーズ：学校に行って欲しい。

詳しい聞き取り
調査の結果…

真のニーズ：安心して生活したい

学校と連携
・お子さんの状況把握
感覚特性、学習の状態
周囲とのコミュニケーション
・WISCなどの検査

＋母子の相性

学校 OT 相談

母の様子から
・お母さんの性格特性
・お母さんの生活不安の相談
母子家庭・貧困

子育て応援課と連携
・ひとり親 家庭支援

社会福祉協議会と連携
・貸付保証人

精神的不安からの**買い物依存症**
仕事も続かず、借金を払っていけていない。**医療と連携**

とりあえず支援
フードバンク

お金のない状況を繰り返しているため
・家計相談

多職種連携の発達障がい児を支える支援②

お父さんからの相談：知的障害の娘。B2手帳あり。
学校の職場体験に行った後、元気がない。食欲もなく髪の毛が抜けた時々「死にたい」と言う。とにかく心配だ。

父のニーズ：娘が元気になって欲しい。 → **真のニーズ：安心して生活したい。**

軽度知的障害の父と娘。祖母の３人家族。
キーパーソンだった祖母の高齢化により家事などができなくなった
・父の性格特性・不安症で攻撃的
・娘の性格特性・まじめで頑固

もともと心配性の父が、祖母の入院により、パニック状態に。**「ふらっと」が整理**して伝える

学校と連携
・友だちがいなく、家庭的にも話せる人がいない
・なんでも話せる大人が必要。
孤独防止
医療と連携　心身のケア

家庭支援員と連携
・卒業後も福祉と繋がって相談できるように

子育て応援課と連携
・ひとり親 家庭支援（引き続き）

地域包括ケア課と連携
・祖母の今後を考える
入所のタイミング等

社会福祉協議会と連携
お金の管理ができないため、通帳を分けて項目ごとに引き落とし
・家計管理

「ふらっと」は何をしているの？

障がい（生きづらさ）がある児者が、その障がいとともに生き生きと生きるための
お手伝いをしています。

・相談では、今何が起こっているのかをしっかり聞き取ります。
・特性のある人は見立てをし、困りごとが起きている原因を一緒に考え、伝えます。
・周りの理解を深めるとともに、できることとできないことを整理します。
・希望することができないときは、どんな努力をすればどこまでならできるのか、ツール等で考え方向性を決めます。（専門相談）
・メタ認知できていないと、間違った方向に留まることになりがちです。安易に応援するのではなく、枠を決めて対応します。
・相談者が自分らしく生きるために必要な支援をしてくれる機関に繋げます。連携もします。連携とは情報共有だけでなく、役割分担だと考えています。なので指揮者は必要です。
・機関の相談も受け、専門家と一緒に考えます。

障がい（生きづらさ）のある児者は、自分らしく生きるための場所（環境）が広くないことが多いです。なので、その場所（環境）を見つけることがとても大切です。
「ふらっと」はそのために、相談にのり、環境の調節を図り、メタ認知や予防のための支援をしています。

＜紹介＞
飛騨市の学校作業療法についての本が出ました

飛騨市の作業療法士との連携や取り組みの経緯、教育現場とのやりとり、具体的な学校作業療法の理論と実践などが書かれています。

発行：2024年10月
出版社：クリエイツかもがわ
定価：2,200円